

Improvingly be in fresh wineskins

— 金沢大学十全医学会雑誌の今後を考える —

金沢大学大学院医学系研究科
循環医科学専攻血管分子生物学 (生化学第二)
山 本 博

*new wine is poured into fresh wineskins,
and both will keep in good condition*

(Matthews 9.17)

1. ニューミレニアム初年, 日本, 大学

6月18日, 本学の入試ミス問題が全国を駆け抜けた。4月, 新年度のスタートとともに大学院医学系研究科の重点化が成っていたことは幸いであった。これがもし逆だったら, 大学院改組は先送りされたであろう。私たちは, しかし, 安穩としてはいられない。研究科の新体制に適うように諸制度を整え教育研究の実を挙げるよう運用を図ることが急務であるし, 新たな展開を見せているわが国の高等教育施策にも機を逸せず対応してゆかねばならないからである。

遠山文部科学大臣によって, まず経済財政諮問会議 (6月11日開催) に, ついで国立大学長会議 (6月13-14日) に提出された, (1)国立大学の大胆な再編・統合, (2)民間的経営手法の取り入れ, (3)第三者評価による競争原理の導入を骨子とする「大学 (国立大学) の構造改革の方針」は, 大学人を驚愕させるものであった。「聖域なき構造改革」を謳う小泉内閣にあって, 遠山文部科学省は, 人材教育や学術文化, 科学技術にも「聖域なき」と考えたようであるが, お宅が生き残りたいなら新しい「国立大学法人」に早期移行する案を2002年1月までに示しなさい, それができなかった大学には (多分苦い) 本省案を飲んでもらうこととなりますよ, とすこぶる強面である。大学院重点化を早も昔話に, 2003年がタイムリミットといわれた独立行政法人化さえも, きのうの夢物語にするかの急な話である。

一国の高等教育施策がこれ程までに速い速度で転回するのは如何なものかと思われるが, 引き続き不況や絶対的な少子化といった社会情勢を鑑みれば止むなき面もある。文部科学省が世界最高水準に育成するという国公私「トップ30」へのサバイバルレースの火蓋も切られた今, 本学も角間・宝町両キャンパスの総力を挙げて将来の在るべき姿を構想し, 果敢に自己改造に取り組んでゆくのでなくてはならない。

2. 大学院と学位審査制度

世界のトップレベルに伍するうえで最も問われるのは学問業績の質と量である。そして, このため最も重要なのは人材, 殊に, 卓越した指導者層と大学院生を主力とする若い世代の活力である。教官は若い力の偉大さにはしばしば驚かされる。多くのケースでそれは, thesis workが結実しようとするとき頂点に達する。これを如何に正しく有効に本人と母校の名を高からしめる方向に導きうるかに大学の浮沈が懸かっているといっても過言ではあるまい。東北大学, 千葉大学, 新潟大学, 神戸大学, 九州大学, 熊本大学は, 制度的にあるいは恒例として臨床系院生を基礎系分野・講座に派遣し thesis 研究に専念させている。熊本大学の学位審査では1時間という学会特別講演なみのプレゼンテーションを被審査者に課すという。院生を top author とする full paper がこれらの大学か

らどんどん生まれてきている所以であろう。本研究科は, 脳・がん・循環・環境医科学の各目的重点型専攻に基礎臨床融合型の大講座を設けた。これにより, 従前に増して基礎臨床間の実質的な交流・協調が図られやすくなったと思われる。具体的なオプションとしては, (A) 中西医学部長時代に始められた複数分野への配属制の賦活, (B) 研究着手に先立ち予め目的や戦略戦術を評価・指導する project proposal 審査会の施行, (C) 実験遂行ならびに論文作成の段階での超分野的な指導等が想定される。

一方, 高い山ほど広い裾野をもつように, 本研究科の充実のためには大学院入学と学位審査の間口を拓ける大らかさも必要かと思われる。まず, (イ) 国際コースや社会人コースの活用も含め全スタッフが大学院定員充足のための努力を払うべきである。学位論文は英文が望ましいと考えられるが, (ロ) 独自に peer review するのだから, 対象を preprint あるいは submitted manuscript まで上げ, (ハ) その仕事の impact が大きければ, 2nd あるいは 3rd author でも thesis work として認めてもよいのではないか。

*To be, or not to be: that is the question:
The undiscovered country puzzles the will,
And makes us rather bear those ills we have,
Than fly to others that we know not of?*

(Hamlet III.i.)

3. 金沢大学十全医学会雑誌

金沢大学十全医学会雑誌をどう位置付けるかは, 今後の学位審査のあり方を考えるうえで避けては通りえぬ問題である。明治29年11月25日の創刊以来約1世紀の長きに亘って本学の学術活動を江湖に知らしめ, 数多の医博誕生に貢献してきた本誌を抜きに金沢大学医学部の歴史は語りえず, また, 歴代編集委員長・委員, 寄稿された全ての先後輩ならびに関係各位のご尽力には敬意を表して尚余りあるところであるが, 国際化や情報化, 大学のボーダーレス化が格段に進んだ今日, 本誌はすでに歴史的役割を終えており, 現行のスタイルでは存在意義に乏しい, というのが大方の率直な見解ではあるまいか。存続か廃刊かの二者択一的な議論もあろうが, 私は英文国際ジャーナルに発展的に転換しえないものかと思う。院生の original article だけでなく助教授・講師・助手・ポストドクター等による review も掲載することにすれば, 中堅クラスの業績アップにもつながり, また, 引用頻度が上がるように努めれば, impact factor の獲得も夢ではない。外国人学生・研究者にも投稿の道が開かれることになる。

シェークスピアは主人公の死を以て悲劇ハムレットの幕を閉じた。私たちが目指すべきは悲劇の終わりでも喜劇の終わりでもない。やがてどう称われることになるかはわからないが, 嘗ては第四高等学校醫學部, 金澤醫學專門學校, 金澤醫科大學, 金沢大学医学部, 今は金沢大学大学院医学系研究科という名の舞台の幕を開け続けることである。不断に, 世界と未来へ。